富士高だより

克己心身を練れ
勤勉実力を養え
至誠事に当れ

第 191 号　令和５年 12 月 25 日(月)　静岡県立富士高等学校　　静岡県富士市松本 17 番地
http://www.edu.pref.shizuoka.jp/fuji-h/home.nsf　　電　話 (0545)61-0100

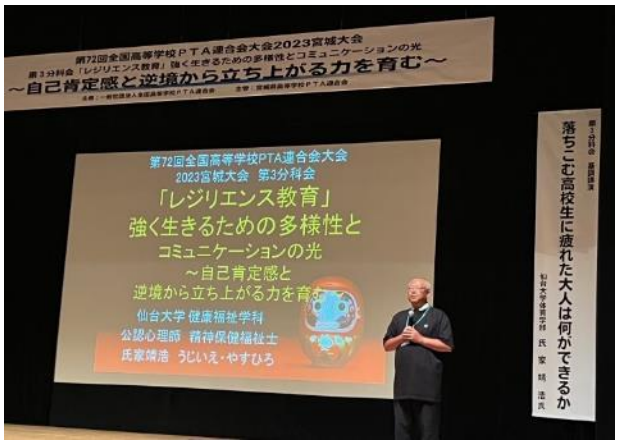
「全国 PTA 連合会２０２３宮城大会」

富士高 PTA 会長　佐野　元産

去る 2023 年 8 月 24・25 日、仙台市を会場に全国から約 6000 人が集まり、「全国 PTA 連合会 2023 宮城大会」が開催されました。

「豊かな杜につむぐ虹の光～しなやかな強さで生き抜く力～」を大会テーマに、１日目は６つの分科会（６会場）が行われ、当校は事前申込みした「レジリエンス教育」について学ぶ第３分科会に参加しました。

基調講演の講師は、仙台大学教授の氏家靖浩氏でした。そもそも「レジリエンス？？」の私は、スマホで検索。”resilience” ＝「回復力」、「復元力」、「耐久力」、「再起力」、「弾力」などという意味と知り、「困難をしなやかに乗り越え回復する力」という付け焼刃の知識を持って臨みました。



演題「落ち込む高校生に疲れた大人は何ができるか」に沿った講演は、開始から会場全体を巻き込んで、爆笑と小笑の連続でした。健康福祉学分野での博士である氏家氏は、「弱っている人にやさしく出来る人を育てる」ために複数の大学や病院の現場に携わったことから、「まず寄り添い話を聴く」、「同じ目線に立って話を聴く」ところからはじまり、日々の生活は、ポジティブな事柄とネガティブな事柄が交互に連続して起きる中で、弱っている時や負けた時こそ人の器の大きさが表れることや、私たち大人が上から目線で偉そうに経験や意見を語ることは、子どもの「自己肯定感を育む」助けにはならない（自分がかつてそう思って来たように）ことなど、熱い語り口が印象的でした。

続いて行われたパネルディスカッションでは、母親、現役大学生、高校校長の三者が登壇しました。それぞれが経験した挫折と悩みを、涙と笑いを交えて語って下さり、どうやって乗り越えて再起・回復に結びつけたのか、大変身近に感じるお話に共感と感動を覚え、清々しい気持ちで初日を終えました。

２日目のメインは、仙台育英学園高校野球部監督・須江航（すえ わたる）氏の基調講演でした。折しも同部が夏の甲子園大会で準優勝、凱旋した翌日の開催日程でもあり、会場内の熱気は最高潮。ご自身が同校OBでもある「生監督さん」のお話に聴き入りました。

本人曰く「高校では中学までの野球実績は役に立たず、一度も試合に出られなかった」そう。在学中にチームが勝つために支える役目（学生コーチ）に身を転じ、その役割の価値と面白さに気付くと、教員になってからは「負けた時こそ成長のチャンス」の信念を生徒に伝えてきたとのこと。そう、あの「人生は敗者復活」の名言です。

「生徒との対話を第一に、まず丁寧に話を聴くこと。」
甲子園での球児たちの伸びのびしたプレーに、その成果は十二分に表れていると納得させられました。
「仙台育英高校が決勝戦まで進んだ陰には、敗れた全国の３０００を超えるチームが存在しており、大切なのは彼らがこの経験を人生に生かしていくこと。」
なんと人間味に富んだ監督さんだろうと最後まで引き付けられ、あっという間の時間終了でした。

引き続き全体の閉会式にて、来年度開催地の茨城県に大会旗が渡され、全日程が終了しました。

残暑厳しい杜の都でしたが、あの大震災からの復興・再起・回復力を感じながら白石副校長、田中先生と同行させていただいた２日間は大変有意義でした。

（もちろん宮城の名産品への舌鼓も忘れませんでした。）

「令和５年度 PTA 進路講演会」

富士高 PTA 富士支部　松永　絵美

９月 26 日（火）ロゼシアター小ホールにおいて、富士高 PTA 富士支部主催の進路講演会を開催致しました。

第１部では、富士市長　小長井義正様を講師としてお招きし、「生涯青春都市を目指して」～富士高生に選ばれるまちとは何か～と題して講演を聞きました。
実は、この講演会は令和３年度に市長の登壇を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症が急拡大し、緊急事態宣言の発令で市長の講演は中止となった
経緯があり、２年前の思いも込めての講演となりました。

講演では、学生時代のお話や、市長になるまでの道のり、ご自身の子育て観などを聞き、市長の人柄に触れることができました。また、同市のブランドメッセージ「いただきへの、はじまり　富士市」に込められた市政への思いなども聞くことができました。このメッセージは、海抜 0m から富士山まで市域を持つ日本で唯一のまちという、まさに富士市のオンリーワンの魅力を一言で表しているのそうです。

子どもたちが、将来富士市に誇りを持って戻って来ることができる、魅力的な市になればいいなと思いました。

第２部では富士高校進路課長の奥村雅尚先生から、「理想の進路を実現するために」～入試が変わる前後にチャンスあり～と題してお話しを聞きました。

大学の入試の現状、志望校選択についてなど、どの保護者も興味がある話題ばかりでした。

『自分の志望校と大学のマッチングが大事！』

『合格することよりも、自分のやりたいことができるかの方が重要！！』

先生のお話を聞き、改めてわが子の進路について考えさせられた参加者も多かったのではないでしょうか。

奥村先生のお話は情報満載で、受験変革期における適切な対応が求められていることを知ることができました。25 年前と現在のデータを比較すると、現在の受験状況では保護者の協力が不可欠となってきているそうです。

我が子を信じ、最善のサポートをしながら、子どもたちが選んだ進路を応援していきたいと思った貴重な時間でした。

毎年、進路講演会は２部構成で開催しています。お忙しい時期とは思いますが、大変有意義な会ですので、一人でも多くの方に参加してほしいと思いました。

最後に、今年度も多くの方に足を運んで頂き、また皆様のご協力のもと無事に進路講演会を開催できましたこと、富士支部一同感謝申し上げます。

「令和５年度 PTA 茶話会」

富士高 PTA 富士宮支部　茶話会担当　鈴木　優孝

令和５年 10 月 28 日（土）、富士高 PTA 富士宮支部は富士山本宮浅間大社の参集所で『茶話会』を催しました。

茶話会は、富士高卒業生の保護者から実体験を伺える貴重な機会として毎年恒例の行事となっています。今年は小林校長、田中先生ご隣席のもと、卒業生の保護者９名をお招きし、在校生の保護者 53 名（うち富士支部、吉原支部からも数名）が参加、総勢 64 名での開催になりました。

午後６時30分、会場の大広間を満たして茶話会が始まりました。およそ２時間の催しの中で、前半と後半でグループを変えました。前半は、予め伺っていた専攻や進路の希望を参考にしたグループにし、後半は学年別のグループで談話しました。こうすることで、参加者は関心のある分野の情報に触れ、同じ学年の保護者との交流を深めやすくなりました。また前半と後半でグループを変えることによって、新たな視点や情報を得ることもできました。

前半では、卒業生の保護者から様々なお話しが語られました。早くから進路を明確に定めていたケースもあれば、なかなか決まらずに卒業間近を迎えたケースもありました。兄弟で別の高校に通っていたり、学業と部活の両立に不安を抱えていたり、塾に行かせるか否か迷っているなど、それぞれのリアルな悩みが飛び交いました。

後半では、学年ごとに保護者が気を付けておくこと、できることなどを具体的に教わりました。

１年生の保護者は、子どもたちが高校生活に慣れてゆくプロセスにありながらも既に進路選びが始まっていることを知らされ、どのようにサポートするのかアドバイスをいただきました。

２年生の保護者は、まさに進路選択に直面する子どものためにできる情報収集のヒントをいただきました。３年生の保護者は、入試の対策や実態を聴きながら、受験勉強の支え方について励ましをいただきました。

小林校長と田中先生は最初から最後までご出席くださり、茶話会の初めと終わりにご挨拶をいただきました。

また、会の最中にも各グループの話題を俯瞰しながら要所でアドバイスをご提供くださいました。

茶話会を通して、在学中に保護者ができることを知り、子どもの未来についてより深く考えるきっかけが得られたことはとても有意義なことでした。

また、新しい人脈が生まれることも茶話会の醍醐味であり、年齢層も背景も様々な保護者同士の、多様性に満ちた交流がそこかしこで見受けられました。

茶話会は富士宮支部の事業ではありますが、今年は富士・吉原両支部からもご参加いただくことができました。

今後とも本事業に多くの方々が集い、学びや交流を深められる場となれば嬉しく思います。

「令和５年度 PTA バス研修旅行」

富士宮支部長　河村徳之
研修旅行担当　長坂光弘、寺井寿典

令和５年 11 月 25 日（土）、富士高校 PTA 本部主要行事の１つ「PTA バス研修旅行」が４年ぶりに開催されました。

当日は朝早くにも関わらず、集合時間 30 分前には多くの参加者が受付を取り囲み、互いに談笑し、期待や喜びが溢れていました。

寒空の中、小林校長先生と田中先生ご臨席の下、富士支部１３名、吉原支部１３名、富士宮支部２９名の計５７名がバス２台に乗り込み朝７時に富士高校を出発しましました。

車内では日々の子育てや家庭、仕事など様々な花が咲き、東名高速道路を爽快に走りながら目的地の早稲田大学に向かいました。途中、海老名サービスエリアで束の間の休息を取り再出発。互いに自己紹介を行い、少しずつ親睦を深めていきました。

高速道路を降り、早稲田大学に到着すると大隈記念講堂前で参加者全員の記念撮影、正門を抜け、鮮やかに彩るイチョウ並木を横目に、早稲田大学創設者の大隈重信銅像の前で、富士高校を卒業した現役の早大生３名と対面しました。

早速、参加者が３グループに分かれ、それぞれの現役生からキャンパス案内をして頂きました。

ガラス張りの近代的デザインとレトロなデザインが融合された校舎内外や、280 万冊の蔵書を誇り１日平均 2,000 人が利用する中央図書館、紅葉が大変綺麗な学生の憩いの場の大隈庭園、大学公式グッズが並ぶユニバーシティカフェ等々、大学の歴史や学生生活のエピソード、質疑応答を交えながら１時間程度でご案内頂き、　キャンパスの雰囲気を体験でき卒業後の活躍の様子も想像しながら、とても有意義なひと時となりました。

卒業生との別れを惜しみつつ、早稲田大学の余韻に浸りながらバスに乗り込み、一行は上野方面へ。午後からは博物館、美術館、動物園、お買物文化と観光の拠点である上野自由散策となりました。

活気溢れるアメ横を散策しながら名物を堪能し、たくさんの選択肢の中から 16 時の出発時間まで各々自由に散策し、非日常を存分に味わい大変楽しい時間を過ごす事ができました。

研修旅行終了後のアンケートでは、「卒業生の説明が丁寧で質疑応答の時間もありとても良かった」、「富士高を卒業した大学生に案内してもらえたのがとても価値がある」、「富士高校の先輩方という親近感があり楽しかった」、「どんな大学生活を送っているのかその一端を垣間見ることができ安心した」、「上野での自由散策も楽しかった」、「久しぶりに親同士でたくさん話ができて楽しかった」、「思い切って参加し本当に良かった」等々、たくさんの喜びの言葉を頂きました。

このイベントを通して、学びや体験、気分転換ができたと同時に、子育ての中で様々な思いを持つ親同士のより良いコミュニケーションの場を持てた事もまた大きな収穫であったように感じます。

この研修旅行を実施するにあたり、研修先の選定や、行程の計画、バス会社との調整、大学生との打合せ、募集案内、配車配席計画、しおり作成など様々な準備を経て進めて参りましたが、多く方々にご協力頂き無事実施する事ができました事、改めて感謝申し上げます。

次年度は吉原支部様主催の企画運営となりますが、一緒に盛り上げて行きたいと思いますので、また多くの方々のご参加をよろしくお願いいたします。

「雑感～ロイロノートと ChatGPT～」

静岡県立富士高等学校　教頭　矢端寛之

この４月から富士高校に赴任し、２年ぶりに授業を受け持つことになりました。教壇から離れていた２年の間に、学習指導要領は新しくなり、生徒には一人一台端末が整備されました。

着任後の研修では、教員用の iPad が貸与され、今年度から導入したロイロノートの使い方について説明がありました。ロイロノートとは、生徒の端末にインストールされた学習支援アプリで、授業中にインタ

ーネットを通して生徒同士が情報共有をしながら学習を行うためのシステムのことです。

4月当初は、iPadと教室に備え付けられたプロジェクターとの接続方法も分からず、昔ながらのチョーク&トークで授業を行っていましたが、各教科で先生方が積極的にロイロノートを活用し、問題演習や小テスト、対話的な授業を展開している姿を見て、「やらねばならぬ」という気持ちになってきました。

ロイロノートには様々な機能がありますが、この原稿を書いている時点で活用できているのは、課題の配信と提出、カードを使ったグループワーク程度です。これまで授業プリントも紙で分けていましたが、最近はロイロで配信するようにしたので、授業での配布物はかなり少なくなりました。また、これまで黒板に板書していた内容も、パワーポイントでスライドにして教室のスクリーンに映すことにしました。その結果、生徒に背中を向けて板書をする時間も短くなりました。

私が受け持っている授業は1、2年生の「国語」ですが、その日の展開によっては、生徒がiPadの画面を一心不乱にタッチペンで叩き続けて終わるということもあります。プリントの印刷と配布・回収、板書の量が減ることで、効率的に授業が行えるようになった反面、手書きによる学習効果が失われることへの不安もあります。デジタルとアナログをどのように融合させていくのか、というのが今後の課題となりそうです。

一人一台端末を活用した授業で頭が一杯のところに、新たな課題として浮上したのが生成AIの利用です。生成AIについては、情報の信頼性や著作権侵害の問題などの懸念がありますが、今後授業においても活用していく流れとなりそうです。

生成AIを「国語」の授業でどのように活用していくか。あれこれ考える中で、先日、試みとして、生徒に課した評論文の100字要約を「ChatGPT-3.5」(対話型AI)にも書かせてみました。その出来映えは、残念ながら本校生徒に及ぶものではありませんでした。また、生徒に教えてもらった流行語「蛙化現象」も説明させてみましたが、これもまた的外れな回答が返ってきました。

ただ、生成AIはまだ誕生したばかりで、これから急速に成長していくと言われているので、遠くない将来、これまでの授業風景を一変させることになるかもしれません。

授業準備に追われ、毎日あたふたしていますが、授業を通して生徒に接することで、多くの刺激を与えられています。この幸せを噛みしめながら、今後も管理職業務に取り組んで行きたいと思います。

3年部だより

学年主任　青木照明

10月13日(金)、3年生は各クラス1台の貸し切りバスで横浜遠足に行ってきました。10月試験が終わった翌日、次の日の全統模試のことを忘れているかのごとく真剣に取り組み、気分転換になったと思います。また、11月15日(水)には、高校生最後の球技大会が行われました。優勝チームの体育委員のコメントを掲載します。

男子アルティメット優勝チーム　　33ＨＲ　髙橋　空来

高校生最後の球技大会で優勝を収めることができ、うれしさで一杯です。アルティメットは、一人一人の個人技が試されるだけでなく、仲間とのパス速攻や声の掛け合いなどチームワークも試されるスポーツです。そのため、自分一人だけが強くなればよいというのではなく、皆でレベルアップを図らなければいけませんでした。我々のクラスでは、短い練習時間の中で、フォア・サイドパス、ショート・ロングパ

ス、ディフェンス付きの鳥かごによる守備 and パスワーク練など必要な練習を各々の役割ごとに意識しながら練習していたのは、他のクラスよりも優れていたことだと自信を持って言えます。また、戦術に関しても、対戦するクラスの攻撃・守備特性を観察した上で、どういう攻守にするかとチームで考えて勝つためにみんなで努力しました。実際に試合では上手くいかないことの方が多かったですが、それでも練習で想定したことができたり、エンドラインの付近の接戦で競り勝って得点できたときは最高に盛り上がりました。今回の優勝はみんなの頑張りと勝ちたいという気持ちが結果に結びついたのだと思います。今回の優勝を糧に受験勉強もラストスパートをかけて頑張っていきたいです。

女子バレーボール優勝チーム　　34ＨＲ　稲葉　暖乃

高校生最後の大会で優勝することができてとても嬉しかったです。担任の定塚先生が富士高に来てから受けもったクラスの女子は、毎年球技大会で優勝してきたので、定塚先生の連覇を途絶えさせるわけにはいかないと、クラスみんなで団結して練習に励みました。私のクラスは経験者が多かったので、体育の授業では経験者を中心にアドバイスを出し合って本番に向けて頑張りました。日が経つにつれてラリーの回数も増えていき、バレーボールらしいバレーができるようになっていったと思います。本番では、練習の成果を十分に発揮することができました。特に、体育の授業でサーブ練習をたくさんしたので、本番で全員サーブが入ったことが一番嬉しかったです。また、34HR の強みである男女の仲の良さを活かして、応援でも一致団結することができました。楽しい行事が全て終わってしまって残るは受験ですが、みんなで励ましあって頑張ります！

２年部だより

高原教室を終えて　　学年主任　石川貴子

天候に恵まれたさわやかな気候の中、自然を満喫し、仲間と絆を深めたとても良い高原教室になりました。生徒が一人一人ルールを守り、体調管理をしっかりして過ごしてくれたからです。おかげで大きな怪我もなく体調不良者が出て途中で離団することもなく日程を終えることができました。

高原教室のメインの活動である登山を通して、自然の厳しさを感じると共に、自然の美しさや壮大さを肌で感じたことでしょう。同行してくれた山岳ガイドさんに、山の歩き方やペースだけでなく、山の植物のこと、尾瀬や谷川の歴史についても教えていただきました。道中雪の重みで曲がった木をたくさん見ました。大雪が降ると、雪を受け止めながら生きていかなくてはならないので、木は形を変えます。そして、雪の重さに耐えて春を待ちます。ただ待つだけでなく自分にのしかかる重い雪を適度に捨てる工夫をしながら生き延びていくことも教わりました。そうした順応性や物事に臨機応変に対処し取捨選択していく力は人間にも必要な力だと植物から教わりました。ガイドさんの話を聞きながら、一歩一歩前に進んで行くと、沢を裸足で渡らなければならない場面に遭遇したり、急な坂に心が折れそうになったりしましたが、一緒に登ってくれた生徒の励ましの言葉や頑張って登っている姿に鼓舞され最後まで歩くことができました。一人ならばとっくにゴールをあきらめていたと思います。大変だったからこそ、ゴール地点で見た風景がなお一層素晴らしく特別なもののように感じました。

高原教室中、生徒達が、自分たちで工夫して楽しんでいたことも印象に残っています。受動的ではなく能動的に楽しみを見つけていました。与えられた環境を嘆くのではなく、そこでできることを考えて楽しめる力は人生を生きるために必要な力です。また大変なことを乗り切った時に得られた達成感を知っている人はまた大変なことに出会っても逃げずに挑戦してまたやり遂げた喜びを味わうために頑張れる人になれます。みんなにはその能力がしっかり備わっているなと頼もしく思いました。

先日たまたま本校の生徒達と同じ山を登っていた方からお手紙をいただきました。『・・・彼らの屈託のないやりとり、言葉の端々にある高揚感、そして学校生活の楽しさ、聞いている私にも爽やかな涼風が吹き込んできた感じがしました。道がきつければお互いに励まし、心地よければ歓声を上げ、とても若者らしいさわやかさに満ちていました。その姿から私は本当に元気をもらいました。・・・』（手紙の抜粋）私達２年部の教員は、この手紙をいただいて本当に嬉しく、皆さんのことを誇らしく思いました。

この高原教室を通して、自然に対する敬意を持つと共に、学校生活では見ることができない生徒の皆さんの良い面をたくさん見ることができました。山登りのように、自分の目標に向かって、時には友達と励まし合いながら、一歩ずつ前を向いて進んでいってほしいです。

今回の高原教室は生徒主体で動いた場面が多く見られました。その中心で活躍してくれたのが高原教室実行委員の生徒達です。29 人の生徒が引き受けてくれました。こんなにも多くの人が積極的に行事に関わろうとしてくれたことを大変嬉しく思います。代表して、3 人の感想を紹介したいと思います。

＜無事だった一の倉沢＞　　22HR 海野帆希

難易度が星一つと書かれていたから一の倉沢を選んだというのに、想像以上に苦労したのは私だけではないだろう。第一に、前日の雨による沢の増水だ。ガイドの方も想定しておらず、裸足で渡らなければならないと聞いた時は驚きを隠せなかった。水温は、12 度ほどで身の危険を感じた。二つ目に、0.3km に及ぶ急勾配だ。小休憩した後に待ち構えていた看板に書かれていた文字を見た時は、余裕に思われた。しかし、進んでいくうちに雲行きがあやしくなった。とても滑りやすく、蒸し暑かったためかなり辛かった。このようなことはあったものの、普段ではできないような経験をし、さまざまな発見があった１日はとても楽しいものだった。勉強や悩みを忘れて、仲間と過ごした 4 日間はこれからも大切なものとなるだろう。

＜登頂＞　　25HR 野田晴香

私は一日目、至仏山に登りました。至仏山に挑戦したのは、標高による植生の変化、寒暖差を生で感じてみたかったからです。なかなか山に登る機会がありませんし、高いところに登る時はエレベーターやロープウェイ、せいぜい１５分で頂上に着くものばかりだったので、ゆっくりと、でも山頂に近づくにつれ確実に減っていく木々、ごつごつした岩場への移り変わりを間近で見ることができ、とても良い経験になりました。また、頂上に近づくにつれ辛くなるイメージでしたが、前日の雨で木道が滑っていたため前半の比較的平坦で簡単（とされる）道が一番滑って怖かったです。標高が高くなると、静岡では滅多に見られない雪に触れることができ、疲れより高揚した気持ちの方が勝っていました。自分だけではやってみようと思わなかった登山を、みんなで挑戦できて、とても楽しい思い出になりました。ここで得た達成感を忘れずに残りの高校生活を頑張っていきたいです。

＜富岡製糸場＞　　23HR 髙塚健聖

待ちに待った高原教室１日目、私たちＡ隊は富岡製糸場に向かいました。私たちを待ち受けていたのは荘厳な煉瓦積みの建物でした。明治維新を支えたうちの一つということもあり、事前学習の頃から楽しみにしていたので想像以上の外観に心を奪われました。外の花壇に植えられたサルビアはとても綺麗で、また、操糸場のトラス構造はとても美しく当時最先端の建築方法が柱で場所を取らないようにし生産効率を上げるための方法が製糸場と見事にマッチしているなぁと思いました。また、今回説明員の方と一緒に回

らせていただき、１人で行ったら見逃しそうな細やかな所までご講義いただきありがたかったです。また、資料館でより深い歴史なども知れたので、よかったです。

１年部だより

効率化の先は　　学年主任　野村 保

世間では、仕事で「テレワーク」が推奨され、学校の授業もオンラインやリモートが可能となり、生徒が iPad を持つようになった昨今、学校現場も急激な変化を遂げています。これは「コロナ」の影響が大きかったのは言うまでもありませんが、社会がとりあえず正常に戻った後も、「効率が良い」「便利なツールである」という理由もあり、デジタル推進の方向へ拍車がかかっています。さらに、生徒の学習にも変化が目立ち、気軽にスマホを使って予習をしたり、授業中でもわからないところがあると、すぐにＳＮＳで調べたりする様子がうかがえます。最近では、驚くことにチャットＧＰＴで文章も作ることが可能になってしまいました。確かに、生徒に時代の先端を積極的に学ばせるところが学校であり、新しいものにたくさん触れさせることも使命であります。特に、現代社会は情報にあふれ、個人が１日に触れる情報量は、何と、江戸時代の人が一年間に触れる情報量に等しいといいます。何かと疑問に感じたら、簡単に調べられるツールに頼りたくなるのも当然でしょう。

しかし、それでいいのでしょうか。車の発明が、現代人の脚力を奪い、電卓の普及により人々の計算力が奪われたように、これら便利なツールのせいで、自ら考えることを厭うようになり、想像力、思考力などの低下につながらないでしょうか。

本校でも近頃、ノートを作らない生徒が出てきました。iPad を教科書代わりにしている生徒もいます。漢字を書かずに画面を眺めて覚えようとする生徒もおり、驚くことが増えてきました。自分のような年配の人間としては、学習はノートを作り、覚えるときには声に出し、同時に手を動かす。そうした五感と共に行うのが学習だと教わってきました。コロナ前には、配信授業は効果があるか、その是非の議論がありましたが、今はその声も聞かなくなりました。「できるか、できないか」の議論が先立ち、「すべきか、すべきでないか」の議論はほとんどなされなくなってしまいました。

この効率化の果てはどうなってしまうのでしょうか。何かと心配になるのは、自分がこの新しい時代に取り残されてしまったからでしょうか。おそらくそれもあるでしょう。ただ、この便利と効率化の先に、今の学校が必要される存在でいられるでしょうか。集団生活をすることのみが、学校の利点だとすると寂しいものです。そうはならないために、授業でもアクティブラーニングを積極的に取り入れ、新しい授業を模索している本校であります。生徒同士、話し合いを多く持ち、意見交換をする中で、相手を尊重し互いに認め合う。3 年間で、思いやりを持ち、優しい心をもった人に育って欲しいと思っています。

さて、生徒たちは、そんな自分の心配をよそに、元気に学校生活を送っています。先日行われた学校行事（保育実習・球技大会）では、心からの笑顔に癒されました。上記のことは、取り越し苦労かもしれませんね。

10 月 13 日（金）の保育実習に松岡保育園で活動した 15HR の元気印 3 名の感想と、11 月８日（水）球技大会のハンドボールで男女アベック優勝した 12HR の代表者からのコメントをもらいました。

＜　Ｉ５ＨＲ　松岡保育園への保育実習　＞

・今回の保育実習で僕たち I5HR は松岡保育園に行きました。事前の準備ではテスト期間も重なったこともあり、大変でしたが、無事に当日を迎えることができました。　　永瀬快翔

・どんな遊びでも園児たちは楽しそうに遊んでくれました。日頃の難しい授業とはまた違った新鮮な体験でした。明るい子供たちの力と、保育者側の責任を身をもって学ぶことができ、もう一回行きたいと思える実習でした。あの園児たちの笑顔は今も忘れられません。　　小畑義宏

・彼らの無邪気な笑顔や遊びに対する姿勢は、僕たちが忘れていた、後先考えずに今を全力で楽しむという姿勢を思い出させてくれました。どんな困難があろうとも、一度しかない人生を全力で楽しんでいこうと思いました。　　川口天空

＜　Ｉ２ＨＲ　球技大会、ハンドボール　＞

・体育の授業が終わる度に、その日の反省を LINE で共有していました。当日は、出場できない仲間の分までやってやろうとクラスがより結束し、優勝することができました。何より、仲間がハンドボールを楽しみ、熱くプレーしてくれたことがとても嬉しかったです。　　植松恒太

・「楽しむことが一番」という思いで練習も試合も和気あいあいとした雰囲気と笑顔に溢れていました。仲の良さを生かして皆で一つになり、主体的に取り組めました。試合は真面目に全力でプレーし、応援や冗談で苦しい時も乗り越えました。どのクラスよりも楽しんで、絆と元気で勝ち取った優勝だと思います。　　村上 静